

1ヶ月間大変お世話になりました。充実した研修生活を送れたこと、五戸総合病院に関わる全てのスタッフへ感謝の気持ちでいっぱいです。五戸を訪れた初日、お風呂場で見たこともない大きさのムカデが出て、裸で尻もちをついてしまったことが懐かしいです。

私は大阪府内で一番の田舎町で育ちました。町には大きな病院はなくなにかあれば、休日夜間問わず診てもらえる小さな診療所が一つだけでした。小さい頃は喘息で酷く苦しみ、夜間に診療所の先生にお願いして診ていただく事がたびたびありました。それもきっかけとなり地域を守る医師に憧れ、医師を目指しました。そのため地域研修先として青森県内の病院があると知り、僻地医療、地域医療に携われる良い機会と考え迷うことなく応募しました。

五戸総合病院では外来、救急、手術、病棟、往診等、すべての分野に関わることができました。外来や往診する先生方の姿を後ろから見て、先生の落ち着いた対応と信頼している患者さんの様子で、これがまさに地域に密着した医療だと実感しました。

初めは大学という急性期病院では接することのないような患者さんとの繋がりに、どのように向き合っていけばいいのかと戸惑うことも多々ありました。ただ、どの患者さんも「先生、先生」と医師を尊敬し、それにしっかり応えようとする医師患者間の信頼関係がありました。高齢者が増加する現代では、急性期の病院と同等それ以上に五戸総合病院のような地域と密着した病院が大切になってくるのではないかと感じました。

また、へき地という限られた医療スタッフの中で、外科の先生が麻酔を導入したり、婦人科の手術に外科の先生が入ったりと、垣根を超えて医療がなされていることに感動しました。地域の病院に行けば手術もなく何もしないと思っていたのですが、むしろ真反対で一人一人の医師が幅広く高い専門性を持ち、それぞれが支えあって医療がなされていました。若い世代の医師は地域医療、へき地医療となると敬遠してしまいがちですが、それは現場をみたことのないイメージだけで考えられていると考えます。院長先生の地域医療に対する真摯な姿勢、地域医療を担う次の世代を積極的に育てていく試みが若い世代の医療への考え方、五戸の将来を変えていくのではないかと思います。

とても有意義な研修期間中に入院していた患者さんで記憶に残っている方がいます。「今日の調子はどうですか？」と聞くと、2週間もの間「わかんね」と言い続けたおばあちゃんです。自分の状態なのに、なぜ分からないのかと疑問に思っていました。ただ後日「わかんね」が「ダメだ」という意味だと聞き衝撃を受け、しっかりおばあちゃんと向き合えていなかったことに対して深く反省しました。それと同時に大阪と青森、同じ日本なのに全く言葉が違う、そんな方言もしくは文化の違いに面白みを感じることができた気がしました。

五戸総合病院での研修期間は大阪の研修以上に研修医というよりも医師として頼りにされました。しかし、その分出来ないこと・分からないことの膨大さに日々無力感を感じました。また、これまで多忙の中あまりふりかえることができなかった治療現場から離れた後の患者さんの生活を考えたり、日常生活に密着した医師患者関係を体感することができ、自分の医師としての価値観を広げる貴重な経験をさせて頂きました。この1ヶ月間の経験を糧に、青森で感じた医師として大事な気持ちを持ち続け、五戸の先生方のような医師を目指そうと

思います。

最後になりましたが、最高の研修となるよう親身になって対応していただいた安藤先生、蝦名先生、初沢先生をはじめとする五戸総合病院の医療スタッフの皆様、事務の方々に心より感謝申し上げます。

本当にありがとうございました。